

7. 廃業予定の酪農場における 牛ウイルス性下痢粘膜病持続感染牛の摘発と清浄化対策

宇佐家畜保健衛生所・¹⁾大分家畜保健衛生所
○大森麻里子・病鑑 中出圭祐¹⁾・(病鑑) 長岡健朗

【はじめに】

牛ウイルス性下痢・粘膜病 (BVD-MD) は牛ウイルス性下痢ウイルス (BVDV) の感染により、一過性の呼吸器症状・下痢症といった多様な症状のほか、妊娠牛が感染した場合には流産、異常産、持続感染 (PI) 牛の娩出が引き起こされる。今回、管内酪農場でBVD-MDのPI牛が摘発されたものの、数年内に廃業を予定していた畜主は対策に消極的であった。そこで、BVDVの他農場への拡散を防止する必要性を説明し、農場の実情にあわせた目標を設定して対策を実施したのでその概要を報告する。

【発生概要】

当該農場は成牛72頭、育成牛23頭の酪農場で、搾乳舎は対頭式つなぎ牛舎である。2018年9月に県内預託育成牧場への入牧前衛生検査において、2頭がBVDV2型によるPI牛 (PI-1・PI-2) と診断され自主的とう汰した。農場内PI牛の摘発のため、全頭の抗原検査を実施したところ、1頭に抗原が確認されたことから、農場内のウイルス伝播を防ぐという畜主の意向により自主的とう汰した (PI-3)。

【疫学調査】

PI-1・PI-2の在胎期間より、2017年6月～8月頃に農場内にBVDVがまん延したと考える。また、同年8月～11月に計6頭の流早産が発生、BVDVの動きが示唆された。同年4月には廃業農場から10頭、7月には別の農場から1頭の成牛が導入されていたがいずれもPI牛ではなかった。

【目標と対策・結果】

目標1：PI牛を他農場に売却しない

対策・結果：新生子牛検査・2018年11月から全ての新生子牛に対してPI牛摘発のため抗原検査を実施。2018年12月にPI牛1頭 (PI-4) が摘発され自主的とう汰した。

目標2：繁殖雌牛の新規感染・PI牛の娩出リスクの低減を図る

対策・結果：繁殖雌牛抗体検査・2019年2月4日時点で農場にいた搾乳牛78頭、育成牛21頭のBVDV2型の抗体検査。すべての牛で抗体保有を確認。

目標3：農場内の清浄化確認後の廃業

対策・結果：育成牛抗体検査・2018年11月～2019年4月に出生した育成牛4頭を供し抗体の消長を確認したが、4頭中3頭で抗体価が上昇。

【まとめ】

本事例では、廃業予定の酪農場においてPI牛4頭が摘発され、経済的損失の大きさから清浄化対策が難航した。しかし、疾病拡散のリスクを畜主が理解し、農場の現状に合わせた対策を実施することでPI牛による他農場へのBVDV拡散を防止した。当該農場では11月に最終の新生子牛検査を終え、農場内に残存している搾乳牛をすべて売却。